

「仮の意思決定の吟味」を位置づけた社会科学学習(2)

上之園 強

1 研究の意図

本研究は、小学校児童の意思決定力の育成を図る試みである。このような授業の一つに「最初に社会的問題場面に出会い、そこから解決策を考えるために自ら探究し、意思決定する¹⁾」展開があるが、この授業実践には、次のような問題点がみられる。

- ① 意思決定力のとらえ方が曖昧なまま学習目標が設定される場合がある。
- ② そのために学習が難しくなったり、不十分なまま決定だけを求める学習に陥ることがある。

そこで、本実践では、上記の問題点を改善するために、小学校で育成する意思決定力を焦点化し、その焦点化された意思決定力を育成する学習過程の改善を行うものである。なお、本実践は昨年度に続く継続的な試みであり、基本的な考え方は、平成10年度研究紀要に基づいている。

2 意思決定力を育成する基本的な考え方

(1) 育成する意思決定力の焦点化

社会科における意思決定力とは、次のような力であるととらえている。

「意思決定力とは、問題場面での自己の行為を科学的な事実認識と反省的に吟味された価値判断に基づいて決定するために必要な能力であり、目的を達成するために、あるいは問題を解決するために考えられるすべての解決策の中から、より望ましいと判断できるものを決定することのできる能力である。²⁾」

この能力は、「民主的な価値観を土台とした事実認識力や価値判断力³⁾」といえる。

社会科において、確かな意思決定を行っていくためには、問題状況や背景を正確に把握していることが前提となる。そこで、小学校では、育成する意思決定力の中核を意思決定に必要な事実認識とし、その事実認識力の育成に焦点をあてた試みを行う。

改善1 意思決定を行うために必要な事実認識力の育成に焦点をあてる。

(2) 主体的で深い意思決定に向かう学習過程

意思決定の基本的な過程⁴⁾を以下のようにとらえている。

- ①問題把握
- ②問題分析
- ③達成すべき目的の明確化
- ④実行可能な解決策の提出
- ⑤解決策の論理的結果の予測
- ⑥解決策の決定と根拠づけ
- ⑦決定に基づく行動

本実践では、事実認識力の育成に焦点をあてていくために、学習導入部①の問題把握の後に「現段階で、解決するためにどうしたらよいか」という問いを設定し、子どもが個々に「仮に意思決定する場」を設定する。そして、仮の意思決を児童が相互に発表し吟味していく。

このような学習展開をとるのは、小学生が問題把握の後に、解決策を見いだすために何を調べたらよいかと考えていくのは、難しいからである。小学生が主体的に意思決定をしていくためには、素朴であっても自分なりの考え（仮の意志決定）を持ち、その考えを出しあい吟味するなかで、不確かさに気づいたり、新たな考え方に気づく場が必要であるとと考えている。この吟味の過程を通して、児童は、より確かな決定を求めようと意欲的になったり、意思決定に必要な「事実を認識する

視点」を見いだしていくのではないかと考えている。

改善2 事実認識に基づいた確かな意思決定をめざして、学習展開の導入部に「仮の意志決定とその吟味を行う場」を位置づける。

そして、学習の後半では、児童が、意思決定に必要な事実をとらえたところで、再度「どうしたらよいか解決策を考えよう」と問いかけ、自分なりの意思決定を深めていく展開を考えている。以上の考え方に基づく学習過程を図示すると次の通りである。

過程	めあて設定	個人での自力追究	集団を通じた追究	達成・発展	
意思決定過程	問題把握 → 問題分析 → 解決策の提出 → 解決策の予測 → 解決策の決定 仮の意思決定の吟味				
子どもの活動	自分の現時点での考えを仮の決定として持ち吟味する	問題の背景や様々な立場、考え方を調べる	調べたことをもとに自分なりの案を考える	自分なりの案を選んだとしたら、どうなるか考える。	自分や他者の考えを参考にしてさらに、決定を修正・深化する
教師の支援	・「どうするか」を具体的に考えられる場づくり	・方途の示唆、試行錯誤 ・時間的保障	・決定の深化を促す 発問や場づくり、 ・新たな資料の提示	・現時点で最良と考える決定を促す場づくり	

- <注> 1) この考え方には、小原友行「社会科における意思決定」社会認識学会編「社会科教育学ハンドブック」明治図書、1994、がある。
概念探究の後で意思決定する考え方には概念探究・価値分析型社会科、岩田一彦「社会科の授業分析」東京書籍、1991、p58.がある。
2) 小原友行「社会科における意思決定」社会認識教育学会編「社会科教育学ハンドブック」明治図書、1994、PP168-17。
3) 社会科教育指導用語辞典（論争問題に対する合理的意思決定能力）教育出版、1986。
4) 小原友行、上掲書、PP172-173、1994。

3 意思決定力を育成する授業の実際 第6学年単元「西広島バイパスの高架道路」の場合

(1) 単元について

「西広島バイパス」は、広島西部地域における都市圏の拡大、人口の増加等により、慢性的な交通渋滞を引き起こしている。朝のラッシュ時には、約8kmの交通渋滞が生じるなど、広島都市圏全体の都市活動や市民生活に影響を及ぼしている。これらの問題に対処するために、広島西部地域からの交通を都心部に円滑に分散・導入する西広島バイパス高架道路を延伸する計画が平成6年8月に立てられた。今回の計画は、第一期延伸であり、観音地域である。この計画に対して、沿線住民からは、交通量の増加に伴う騒音、排ガス等の環境悪化を懸念した反対運動や新設に伴う周辺整備を求める動きが起きている。

このような身近な地域の意見の分かれる交通問題を取り上げ、交通網の整備と人間の生活環境との共存を考えていく単元である。

(2) 単元目標

- 1 道路網の整備と生活環境との共存について、自分なりの考えを持つことができるようにする。
- 2 高架道路延伸問題の背景を理解することができるようにする。
- 3 地図や統計などの基礎的資料や聞き取りを行い、表現することができるようにする。

(3) 単元展開計画..... 8時間

第一次 西広島バイパス高架道路延伸問題を知り、解決策を考えていく見通しをもつ.....(3)
①西広島バイパス高架道路を延伸することが問題になっていることを知る。

- ・慢性的な渋滞 ・効果道路延伸の目的 ・沿線住民の反対意見
 - ②高架道路延伸問題の「仮の解決策を考え、吟味する」ことで、解決策を深めていく視点をもつ。
 - ・解決策を深めるうえでの不明な点 ・解決策を考えていく手順
- 第二次 解決策を深めるために、高架道路延伸問題の背景や対応策を調べる。……………(3)
- ①自分なりに調べる。
 - ②個人で調べたことを学級集団で検討する。
 - ・西広島バイパスの交通量や渋滞の様子 ・高架道路延伸に伴う環境の変化
 - ・沿線住民の考え ・交通渋滞を解決する様々な案
- 第三次 調べたことをもとに、自分なりの解決策を深める。……………(2)
- ①自分なりの解決策を複数考え、一つにしぼる。
 - ・複数の解決策を選択した場合の予測、長所、短所の検討
 - ②解決策を学級集団に出し合い考え方を深め、最終的に決定する。
 - ・共生の視点（交通渋滞緩和、沿線住民の生活環境）からの自分の決定

(4) 実践の概要（紙幅の都合上、第一次に焦点をあてた概要とする）

① 西広島バイパス高架道路の延伸が問題になっていることを知る。

ここでは、慢性的な渋滞緩和のために、高架道路を延伸する計画があること、そのことに沿線住民から、反対意見が出てきていることを把握することがねらいである。

そこで、「国道2号の観音高架600メートル延伸計画」という新聞を提示し、新聞記事をきっかけとして、問題との出会いをうながしていった。読み取りにあたっては、解説した資料も配布し理解を深めた。また、内容の把握については、次の資料と沿線にすんでいる児童の情報をもとにした。

資料・建設省広島国道工事事務所「2号高架、始動」（工事の目的と概要パンフレット）

- ・西広島バイパス入り口交差点、上り線渋滞のキロ数（平11年6月）
- ・渋滞の様子を示す写真
- ・広島市を中心とした道路地図

② 高架道路延伸問題の「仮の解決策」を各自がもつ

児童が、高架道路延伸問題の概要をつかんだところで、様子を実感的に理解していくために、渋滞の様子や高架道路延伸計画の地域の様子をVTRで提示した。そして、渋滞にあった経験を発表しあった。また、反対住民の理由を絵カードで整理し、交通量の多い道路沿いでの困った経験を発表しあった。このような発表のなかで、児童が、渋滞と道路の延伸は自分たちにとっても関わりのある問題であり、何とか解決した方がよいという意識を持ち始めところで、次の発問をし、現時点での解決策（仮の意思決定）を引き出してみた。

このような高架道路延伸問題を（板書の推進賛成、反対を示し）を解決していくために、みなさんはどうしたらよいですか。今の自分だったら、どちらの立場をとりますか。

ここでは、不十分ながらであっても、自分の解決策をもつことが大切である。そこで、子どもたちの解決策を引き出すために、考える時間を十分に確保し、書く場を設定して、考えを整理するようにした。

③ 仮の解決策を互いに吟味し、意思決定のために「何を調べるか」見通しをもつ。

(ア) 仮の解決策を互いに吟味する。

子どもたちが自分なりに現時点での解決策（仮の意思決定）をつくったところで、互いに吟味しあうことにした。ここでは、吟味を通して、意思決定していくために何が必要かを明らかにしていくことをねらっている。そこで、次の手順で行った。

- 1) 自分なりの立場を学級に出し合う。
- 2) それぞれの立場をとった理由を出し合う。
- 3) それぞれの立場をとった理由について、本当にそう言えるのか、互いに吟味しあう。
- 4) 立場をとった理由の不十分な点を明らかにし、確かな意思決定をしていくためには、何を調べておかないといけないか考える。

児童は計画推進が26名、反対が13名（39人学級）であった。その理由を吟味する一例を示すと次のようになる。

- (推進) 環境問題のことは考えているというのだから、大丈夫ではないか。
 (反対) 今でも、喘息で困っている人がいるのだから、環境をよくすることが先ではないか。
 (推進) どのくらいの人が困っているのか。わかっているのか。
 (反対) よくはわからない、でも、一人でもいたらいけないのじゃないか。
 (推進) 沿線の人にも便利なるのだからいいじゃないか。
 (反対) 便利になるかどうかわからない。環境問題は本当に考えているのか。

(イ) 意思決定のために何を調べ、どのような手順で考えるか見通しを持つ。

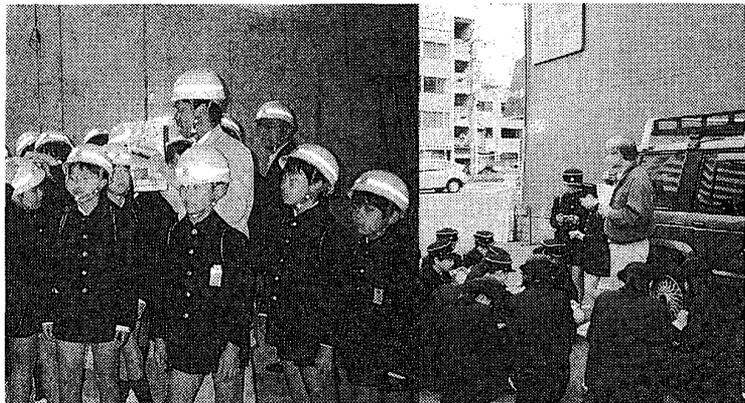
上記のように、児童は現時点での仮の解決策を互いに吟味しあうなかで、自分の考え方の根拠が不十分であることに気づいてきた。また、自分自身の立場（推進、反対、それ以外）についても新たな考え方にふれて、いろいろな角度から考えて行かなくてはいけないことにも気づき始めてきた。

そこで「よりよく意思決定をするためには、何を調べておかないといけないか」を問いかけてみた。子どもたちの考えを整理すると以下の7項目になる。ここで、児童は、実際に現場を訪れることの大切さに気づき始めてきた。そこで、これらを調べ、いろいろな点をとらえた後に改めて意思決定することを確認した。

- ① 高架道路延伸は、どのような計画かさらにくわしく。
(目的、計画の概要・期間、費用、環境対策など)
- ② 沿線住民はどんな考え、気持ちか。
- ③ 高架道路の一般の利用者はどんな考えをもっているか。
- ④ 高架道路で沿線の生活環境はどう変化するのか。
(排気ガスは、騒音は、振動は、日当たりは、)
- ⑤ 渋滞緩和の他の方法はないのか。
- ⑥ すでに高架道路になっている地域の様子、住民の考え。
- ⑦ 県や市は渋滞や道路のことをどう改善しようとしているか。

④ 意思決定に必要な事実を自分で調べる。

自分は、上記のどの視点から調べていくか。また、調べた後、どのような手順で意思決定をしていくかを確認し、個人で調べる学習を設定した。ただし、計画推進の建設省広島工事事務所と沿線住民への聞き取りについては、全員で見学調査計画を設定し、実際に現場に立って考えることを重視した。



4 考察

「仮の意思決定の吟味」を位置づけたことが、児童の「意思決定にむかう事実認識力」を育成する上で、どのような効果をもたらしたかについて考察してみたい。

事実認識力については、プリテストとポストテストを行い、その変容をもとに考察する。内容は、学習していない「JR可部線問題」である。この問題は、公共の利便性と経済的効率性の視点から廃止か存続かで議論の分かれている社会的問題である。そこで、この問題を解決していくためには、解決策を考える前に、「何を調べておかなければならないか」と問いかけてみた。このような問いかけによって、児童が意思決定のために必要な事実認識の視点や具体的項目を、どのくらい獲得しているかをみていく。

学習前と学習後の視点と具体的項目数の変容をみると、視点数については「61→95」、項目数については「88→136」と、ともに増加しており、ほとんどの児童が、視点を増やしたり、より細分化し、具体的項目を持てるようになってきている。

このことから、「仮の意思決定の吟味」を位置づけた実践は、意思決定を行っていくために必要な事実認識の視点を深め明確にしていく上で一定の効果があるといえる。視点や具体的項目が、どのように変容したかをみると主に次の4点となる。

- 問題となっている可部線そのものの現状をさらに具体的に見ようとし始めている。特に、利用者と収益の状況について、現在と過去の変化に着目している。また、可部線の位置や利用者交通手段の変化にも目を向けている。
- 賛成、反対の考え方について、より公平にとらえようとし始めている。学習前は、存続側のみであったものから両方の立場に目を広げている。
- 学習前には少なかった「廃止や存続した場合にどうなるのか」という「予測」の視点を持ち始めている。特に廃止後、住民にとってはどのような交通手段が代替として考えられるのかという点に目を向け始めている。
- 学習前には少なかった、このような問題での一般的な解決策を把握する必要性に気付き始めている。特に、他の事例での具体的な解決策やその後の様子について目を向けている。

意思決定のための事実認識に関する変容（JR可部線問題の事例で）

視 点	具体的項目	事 前			事 後			
		各項目数	項目総数	視点数	各項目数	項目総数	視点数	
可部線の現状	利用状況と収益	31			31			
	沿線の生活状況	9	47	36	9	46	33	
	位置、沿線の自然環境等	7			6			
存続、廃止の理由	存続の理由	22			30			
	廃止の理由	3	25	22	17	47	30	
存続、廃止の影響	存続	経済面	0			1		
		生活面	1	1	1	3	6	6
		自然環境等	0			1		
	廃止	経済面	2			6		
		生活面	3	13	11	5	31	20
		自然環境等	1			5		
一般的解決策	他の事例での解決案等	2	2	2	6	6	6	
全視点、項目の総数			88	61		136	95	

*各項目数と視点内の項目総数のずれは、各項目をすべて含む見方（例 存続したらどうなるか）などがあるためである。